

## 知情意調和の必要：論説

著者	岡嶋，誘
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 6
ページ	1 1 - 1 6
発行年	1899-12-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5446">http://hdl.handle.net/2298/5446</a>

斯學の餘流を酌む者。而して先聖の年壽に於て。正確なる答辯を與ふる能はざるは豈一缺典に非ずや。且つ古今年表の學者に缺く可らざるは。旅行家の地圖に於ける如き。今茲に一年表を編せは。必ず孔子の生年を特筆せざる可らず。編者果えて何れの年に向ふて之を編入せんとするか。況や孔門諸弟子の年齢に於ける。多く之を孔子に本づけ。孔子より少き幾歳と傳へらるゝもの多し。孔子の享年明ならずんば。諸弟子の年齢亦何に因て信を取らんか。其の關係する所鮮少に非ず。是れ余の呶々の辯を費す所以なり。

## 智情意調和の必要 (未定稿)

岡 嶋 誘

仰ぎて遠く望めば蒼天高く覆ひて涯なく俯せば地盤八方に横はりて廣茫漠々盡くる所を見ず相隔する幾千里上は日月星辰より下は山川草木に至るまで森羅萬象占め得し宿纏に麗かる麗るが中に人なる躰あり天女の容か仙人の姿か我は之を知らず唯生理學は教ふ二百數個の骨は脊椎となり胸肋となり骸骨となり譬へは家屋の柱の如く桁の如く棟の如く骨は骨を相支へ相合し此は彼に據り彼は此に連なり個々連續の一全体を形成り絶妙なる一致の大觀を呈す皮は壁の上塗こはみりに似筋肉は寸沙ある泥土に類えて之を抱蔽え五臟六腑内に其營養を司り四肢五官外に其運用をなし腦髓神經脉絡貫通を整然として紊れず即ち之を指して人なる體と稱す而かも其生物にして原素の聚積たる何の時から機能傷損し腐爛を免れざる甚まきは内臓の膨動止み外官其能を失ひ共に屍體は元素の分解を始め敷して極微

に歸する危ける臭体嗚呼人の体なるもの斯の如きものなるか省みて惘然性惘たらざらむや  
然れども決して之を卑しむる勿れ輕する勿れ輕するは破壊の本源卑まむるは墮落の基、此所には一  
個の靈なるものゝ宿り或は存在するありそは玄妙莫測の不可知なり其存在に到りては目以て見る  
能はず耳以て聞く能はず手以て捉ふる能はず捉るべからず聞くべからず見るべからず無色無聲無形  
と雖も其の靈なるものゝ宿り或は存在するに相違なかるべしとは如何なる官能によりてかは疑問の  
中の疑問（今の余に取りて）なるも衆人隴げにも信を措き掌を拊ちて贊意の意を表さ敢て異議を挾  
まざるべし是れ先天的とや言はむ（我學狹く智淺く未だ其存在を後天的に覺知すると能はず然らば  
其存在は淺薄取るに足らざる情感に過ぎざらむされど識を開きて止まずんばいつかこれを悟るの機  
あらむ今は唯其存在するものと思へば足る）顧ふに此靈なるものぞ眞の我にはあらざるか人は此靈  
なるものあり其發動により此脉の存在するを知るにはあらざるなきか、此脉も彼靈に對しては客  
象にあらざるなきか兎に角眞の我は彼の形骸にはあらざるべきされど其機關は彼の形骸にして其座  
位は腦髓、神經は其發動の傳線ならむ我は今此靈なるものに命名して靈魂若くは精神と云はむ靈魂  
の表現するや知情意となり知情意の發動するところには靈魂存す實に靈魂には知情意常に影の形に  
於けるが如く響の物に應ずるか如くに伴隨さ決て相離るゝ事なきなり然れども此三つの者永劫不  
斷其平均と調和と輯睦とを破らむとする傾向あり就中意志と情感とは相拮抗排撃て勝敗の機を爭  
ひ其欲する所の榮位を占めむとすされば其結果意志は情感に勝たれて動かざることあり意志は情感  
を破りて情感動かざることあり而して其一方にきて幸運の下に立つ時はそが及はず影響は尠少にあ  
らず奔逸極りなく偏僻那落の底に陷没す斯る偏僻は喜ぶべきの兆にあらす其迷惑裡の妖雲を拂ふ唯

單に識の如何にあり知淺く識決ければ其當に然るべき理を究むる能はず遂には以て採擇の失を醸す故に吾人は識を養ひ智を求め進みて靈魂を其中に圍繞し理想を強固に之高尚に之情意の我慢を防禦し其調和を圖からざるべからずとは是れ我の鄙見なり

此靈魂なるものが彼形骸を離れて獨立存在し得べきものなるか、知らず今は靈魂此形骸によりて我此處に存す若し其寄所をしも賤しめ蔑にせば即ち此靈魂を妄瀆するなり靈魂を妄瀆するは即其自を賤蔑するなり故に我に之て我自を貴ばんとしては此靈魂を尊び此形骸を重んぜずばあるべからず然れども我の形骸を重んずるは其身軀の健全を希求するのみの謂にあらず(身體の健全を計るはこれ當然の事は時に之に反するもありれどもそれは例外なり)此腐朽し易く占むる所眇乎として僅に六尺を出でず壽を保つ僅に百年を踰えざる

とて軀軀を輕んずるの餘如何なる所作をも働きて差支なきものと思惟し情の馳するところ事の是非を顧みず意志の向ふ所其曲直を辨識せず唯漫然と之て四肢五官を物に觸れ之めて感じ七感を感じ應せしめて起らしめ外には五欲を流し内には三毒を發す嘆すべきに至りなり

惟ひ見るに靈魂と對象との共動によりて初めて成立する宇宙は差別の宇宙(若之然らずとせば一色は一色を甄別する能はざるか如くに宇宙の萬象も我識に現せざるべしこれ我か今の思のみ非か?)

故に我と非我とあり非我なるものは我なる神靈に客象として相對之常に其印象を我の感覺官に與へ感覺官は之を感覺神經に傳へ感覺神經は之を靈魂の主座たる腦髓に傳達す靈魂は之れを感受之て感覺官に應報し四肢五官は其令の下に立ち所作として外界に現出す是れ我靈と外界とが相感識應報する有様にあらざるや而えて人と我と立てる以上は即ち自身の精神か世に於て重きに任ずるか如く又一般人類の精神は此宇宙の諸象に對しても其重きに任ずるならむ實に我等以外に於ける對象は其性質

により吾人の精神と共動するなれど其諸事物吾人の感覺官を通過て來るものは吾人以外に於ける物象に附帶せる性質のみにはあらで是を感覺識認する所の吾人の靈にも存するのみならず其主は我にあるべき鳥の鳴く渠何ぞ我全然我をして悲ましめ或は樂まめんが爲めに鳴かむや然り而して我のこれを聞きて幾多の感情を惹起するものは其因我精神に存せり唯鳥聲の我に及りて悲哀欣喜の調を帶べるが導線となりて爆然溢出するのみ人に欲情あり而て後に其傳導となるべきもの感覺官を通過て其欲増大す人に慈情あり而て後に傳導たるべきもの感覺官を通過するありて其慈悲増大す人に美感ありて後に導火となるべきもの感覺官を通過て其美増大す遮莫又我に意志あり而て其我を主持するの激甚なる渠は鳥の鳴くにも人の窮せるにも物の美なるにも單に之を無情視し何の感懷を萌すことなく美を見て歡はざれば窮を察えて哀ます音を聞きて其妙を悟らず相待ち相倚るの生物も非我なりとて木石に比べ唯我を遂くるの一助とて非情非倫暴恣これ斷々たり而して或は此等の所作となりて外界に現はれ其痕跡を残すものは一に人の形骸に是より即ち靈の發動も亦此形骸に是れ寄る若しや身体にして貴重ならむには何とて偏念を萌すべきものに接え或は偏念を主持え偏念の下に働かしむるに堪へむ遂に引きて其自然と天則との下に之を終らしむるにあらず其の機能未だ整然とて運用まづあるに人爲的に私心より腐爛汚穢せざめて顧ざるに至るとは又極まれりと云ふべき而て進みて靈魂或は精神をえて罪惡の黒雲に蔽はれしめ智識も亦た揀擇制定の道なきに陥らしむ噫

我軀軀を貴ふの念は簡單に此點に於て止まらざるなり我は我たる靈魂か此軀軀に寄りて我自身此に存するの故にこれを貴ふ靈魂存在て其發動するや亦軀軀の五官と四肢とに由るが故に此を重んず

我は靈魂を貴ふの餘此牀軀を貴ぶ靈魂是を重んず何の要がある靈魂の如何は我自身の如何なり而て我牀軀の作用如何に靈妙なるも生機ある靈魂にして消えむか其牀軀の四肢五官はた何の用をかなす否其牀軀を擧げて何の用もなく直に毒虫化生して元素の分解の犠牲となるのみ此に於てか我自らなり故に我自ある以上は靈魂と牀軀とは相俟ふ然り而て牀軀は皆是れ吾自の表現者なり、夫れ吾人に悲哀の感あるや即ち涙涕は滲々として禁する能はず愉快の情あるや歡喜雀躍する能はず怒氣あるや圭角奮扼ふる能はず我意あるや功利と便宜傍物に介せず是等は皆牀軀に藉りて外界に漏る依て他の起居動作を睹て其裏心に潜在する諸の情意を知り其程度を窺ふを得彼自は忍ふるあらむも其牀は之を外漏するに躊躇するなく憚かるところなきなり(内外一致)實に牀軀は其眞衷を現す其眞衷は如何に工夫えて隱匿せんと欲するも決えて正當の理由自の悟りの下に壓するにあらざれば能はざるなり理性智識に訴へ其曲直を批判し揀擇を仰き過ぐるなく及はざるなく情意の平行と諧調を求めざる可らず兎に角牀軀は始終其眞衷の秘密を曝露するものなり以て其表現に依り精神の狀態は直に推知するを得嗚呼如何ばかり靈魂即ち精神の能く總ての點に於て調和を保たざるべからざるや牀軀をえて罪惡の事柄を現はさざらしめざるべからざるべけむや若し現はさざらしめむには精神の調和を計らざるべからず(心身一致)計らざるは其務を果下すればなり而て牀軀は強ひて偏倚を露現するものにあらず唯其精神の中情を現はすもののみ故に靈魂を純美に誘ひ其眞髓を完善にせざるべからず完美と純美を期するは知識の深遠と洪大を圖り意情の平均を保つにあり是に於てか良心の安寧成る良心の安寧成りて外界の表現節に合す之を要するに靈魂は我自らなり我自らは牀軀によりて外界に出現す牀軀を重んずるは是靈魂を重んずるなり即我自を貴ふなり由て以て破壞の域に陥らず

墮落の境界に沒了せず俯仰天地に愧ぢざるの人間か、軀の大小と壽の長短及び其腐爛元素の犠牲に供し一片の土か又は極微に歸すも亦何ぞ意に介ま之を悼み之を憾みむ是れ天則にあらざるや

## 雜 錄

### 茶話會上寮生一般への教示

今夜は、拙がこの學年に入りてよりこのかた、いまた一般の寮生諸子に對えて、篤と談じたるもなく、且一堂に會えたるともなきによりて、先一場の御話をいたし、并せて學寮一般の親睦を結はんため、この茶話會を開きたる次第なり、實はこの學年の始に、入寮式を舉行せんつもりなりとかども、比は、室長室長補も揃はず、何かと準備中に、月日を費すほどに、各室の茶話會などとはじまり、別に入寮式を行ひて、新舊兩生の會見を行ふ必用もなくなりたれば、その方は舉行せざるとぞて、今夜の茶話會とはなりしなり、

既に入學式にも、校長より、生徒の心得につきて、一々その要領を指示せられたる通りなれば、拙に於ては、最早申す所も是なく、今日寮内を巡視するも、各室の清潔整頓、よく行届きたるは、室長室長補の盡力にもよるべく、寮生各自の心掛にもよるへしと存して、拙どもの大に満足する所なれども、とかく慾目といふとのありて、尙一層の寮風を作出たまとの念は、日夜夢寐にも忘れざる所なり、殊に昨年九月入寮式の日、寮生の心得を、七ヶ條掲げて、申置たる事もありて、その條條は、既に同年十一月發行の龍南會雜誌第六十八號に載せたれば、舊生徒の方は、とくにしるるゝ